伝説のテクノロジー
Legendary technology
64

彫金

彫金師・小林正雄さん、浩之さん

鏨(たがね)で打ち出す至高の技

寺社の宝物や仏具などを中心に
彫金の仕事をする小林正雄さん、浩之さん親子。
至高の技術が親から子へと伝えられ、
今日もまた名品が生み出されていく。

現代の名工

三重県にある伊勢神宮では20年に一度、式年遷宮を行う。社殿と神宝などをすべて新調する一大イベントである。

この遷宮のときに彫金の仕事を依頼される彫金師の一人が、小林彫金工芸の小林正雄さんである。この道一筋60年。2014年には厚生労働大臣から「現代の名工」として表彰され、2018年には黄綬褒章を受章した当代きっての彫金師だ。中尊寺金色堂須弥壇(しゅみだん)を飾る「黄金の孔雀」の超細密な紋様を見事に再現したこともある。

小林彫金工芸にはもう一人、彫金師がいる。正雄さんの長男の浩之さんだ。浩之さんも正雄さんの下で伊勢神宮の遷宮の仕事をする。2014年には滋賀県が優秀な若年技能者に贈る「おうみ若者マイスター」に認定されている。

小林彫金工芸は1873（明治６）年、正雄さんの祖父の與三郎(よさぶろう)さんが創業した。正雄さんの父、道三(みちぞう)さんが２代目を継ぎ、正雄さんは３代目である。ただ、與三郎さんと道三さんは錺(かざり)師であった。正雄さんは道三さんから錺の基礎を学んだ後、京都に出て彫金の技も身に付けた。

「地金の板を切ったりして成形するのが錺師で、成形されたものに紋様や字などを彫るのが彫金師。うちの初代と２代目は錺師で、私は錺師としては３代目ですが、彫金師としては初代になります。本来、錺師は彫金のことも知り、彫金師は錺のことも知らなければいけないのですが、京都で錺と彫金が分業されてからは、お互いがおろそかになってしまいました」

そう語る正雄さんによれば、現在、彫金師は全国的に見ても、非常に数が少ないそうだ。わずかな人数の彫金師のうち、浩之さんも含めれば２人が小林彫金工芸にいることになる。

数千本の鏨(たがね)を使いこなす

かつては日本刀の鐔(つば)にも彫金の技が施された。しかし、明治維新で廃刀令が布告され、一般市民の帯刀が禁じられたあおりを食って彫金の仕事は激減した。さらに近年、ライフスタイルや住宅様式の変化によって仏壇を置く家庭が激減したことも彫金師にとっては痛手となった。かつては仏壇や仏具の金物なども、彫金師が活躍するフィールドだったのである。今は仏壇以外の錺金具も廉価な輸入品が幅を利かせているのが実情だ。

それでも小林彫金工芸は、ほとんど営業をしなくても仕事が途切れることはないという。腕のいい彫金師が２人もいるのだから、もっともなことである。

鏨を使って金属の表面に紋様を彫り込む彫金にはさまざまな技法がある。金属の一部を切り取り残した部

「柄香炉」、手炉ともいう。仏前での香供養、礼拝に用いる道具で、彫られている模様は、伝統的な蓮と雲の模様を用いアレンジしたもの。

左から、「現代の名工」に選ばれた彫金師の小林正雄さん、彫金の作業を支える妻の笑子さん、そして2代目の息子、浩之さん。笑子さんの笑顔は、鏨の音が響き張り詰めた作業場を優しく包んでいく。

写真右上、鍋で炊いた松やにを型に流す。右下、正雄さんが描いた彫金の原画と鏨の一部。

こばやし・まさお　1947年、滋賀県生まれ。株式会社小林彫金工芸代表取締役。15歳のときから錺師として仕事を始め、京都で修業して彫金の技術も修得。滋賀県知事から「おうみの名工」、厚生労働大臣から「現代の名工」を受賞。2018年には黄綬褒章受章。今年で75歳になったが、今でも「丸１日仕事を休むのは元日だけ」という。

分で紋様を表現する透かし彫り、蹴るように鏨を打ち込んで線を彫る蹴り彫り、表面を削った金属に別の金属をはめ込む象嵌（ぞうがん）などの技法が代表的だ。どういう技法でどういう紋様を彫るかによって、鏨を使い分ける。小林彫金工芸には仕事に応じてみずからつくった3,000本から4,000本の膨大な数の鏨がある。

「どこにどの鏨があるか全部覚えています。仕事が入ったらすぐ、どの鏨とどの鏨を使うかも頭に浮かびます」

と正雄さんは豪語する。

0.1ミリ以下の精度で打つ

技法の一つで、魚々子（ななこ）と呼ばれるものがある。切っ先の刃が円形になった鏨を打ち込み、非常に微細な粒を置いたように見せる技法だ。一打ちで同時に複数の粒を彫ることのできる鏨もあるが一つひとつ打ち込んでいく「一粒魚々子」ができる彫金師は限られているといわれる。

「最近、魚々子は浩之に任せています。伊勢神宮の仕事をしていたときに浩之は５年くらいずっと魚々子をしていました」

と正雄さん。数千粒の魚々子ともなれば、途方もない根気と集中力が必要になる。

「難しいのは魚々子をそろえること。ほんのわずかでも打つ位置がずれると、次の魚々子が合わなくなってしまいます。0.1ミリ以下の精度で打たなくてはなりませんが、少しでも集中力が切れるともうだめです。彫金は直しが利かないので、気が抜けません」（浩之さん）

松やにを使う矜持

正雄さんたち親子は鏨を打つときに金属を支えるための土台として、松やにに山土を混ぜたものを使う。

「松やにより硬い金属などを土台にする彫金師も多いですが、松やにの上でたたくのと鉄板の上でたたくの

写真左上、「銀蹴地彫金具（ぎんけじぼりかなぐ）」、仏具の框（かまち）に付ける金具。銀全体を鍍金し、模様を蹴り鏨で彫り、魚々子の部分（地の部分）を鋤き取り、魚々子を蒔いた（魚々子を打つことを蒔くという）七宝の紋様を描いている。

こばやし・ひろゆき　1980年、滋賀県生まれ。大阪外国語大学（現大阪大学）外国語学部卒業。イタリアで誇りを持って働く職人の姿を見て日本の伝統工芸を継いでいきたいと思い、卒業後、正雄さんに師事するようになった。2014年度「おうみ若者マイスター」に認定された。2017年には正雄さんとともに親子展を開いている。

とでは出来が違うのです。硬い土台の上でたたくと金属が反り上がってしまうこともあります」（浩之さん）

「伊勢神宮の仕事では、松やにの上でたたく伝統的な方法による柔らかい仕上がりが求められます。伊勢神宮の方々にはその違いがわかるのです」（正雄さん）

松やにには別の用途もある。内側が空洞になった金属を外側からたたくとき、ほかのところがへこまないように、鍋で炊いて柔らかくした松やにを内側に入れるのである。出来上がったら中に入れた松やには取り出す。松やにを鍋で炊くのは、正雄さんの妻の笑子さんだ。

「松やには繰り返し使えます。うちには戦前の松やにもあるんですよ」（笑子さん）

実は彫金師が全員、松やにを使っているわけではない。むしろ、今は正雄さんたちのように松やにを使う彫金師は少数派のようだ。しかし正雄さんたちは手間を惜しまず、今でも松やにを使うことが多い。そのほうがいいものになることを熟知しているからだ。そんな姿勢に彫金師としての誇りがうかがえる。

正雄さんは「彫金師は絵が描けないといけない」と考え、若い頃から日本画や油絵、南画、クロッキーなどさまざまな絵を習ってきた。

そんな正雄さんに師事してきた浩之さんは、「父は何でもできます。僕は象嵌もまだ未熟ですが、まずは伊勢神宮に認められるような仕事ができるようになりたいですね」とあくまでも謙虚だ。

それを聞いて正雄さんは、

「浩之も伊勢神宮の仕事が来たらもうできますよ」

といい、こう付け加えた。

「今のような時代にこういう仕事で後継者がいるというのは幸せなことです」